



2014年2月5日放送

印象に残る症例②

関西医科大学 産婦人科 漢方外来担当 **梶本 めぐみ**

みなさん、こんにちは。前回は不安が原因の外陰部痛を気うつにからめてご紹介いたしました。今回は血液の流れが滞って起こるといわれている瘀血と、年齢を重ねることによって起こる腎虚の二つによって起こった外陰部痛についてお話しようと思います。

人間は誰でも年をとる、このことはみんな知っています。でもそれを誰もが本当に知っているか、心から納得しているかどうかはわかりません。私の祖母はもうすぐ90歳になりますが、70歳になった頃デイケアに行くことを勧めましたら「あんなどころ年寄りばかりじゃないか。私は行かないよ」とケンもほろろに断られました。その時、祖母はまだ元気だったので、自分がお年寄りと呼ばれるに十分な年齢であるということに、頭ではわかっているつもりでも気持ちでは全然納得していなかったのだと思います。祖母はその後デイケアを気に入って、いそいそと通うようになりましたが、人間はゆっくり、ゆっくりと年をとります。だから、なかなか実感としてわかる機会がないのかもしれない。今回はそんな年齢による体力の低下と、それに加えて冷えおよび微小循環障害が原因と考えられる外陰部痛についてお話しようと思います。

症例は69歳の女性で、萎縮性老人性膣症と診断された患者さんです。女性が閉経期を迎え卵巣の機能が低下すると女性ホルモンが低下します。その影響で帯下が減少すると、膣内が乾燥し、性器出血が起こったり、膣の中が痛くなったりといった症状が出てきて、そ

れを萎縮性老人性陰症と言います。一般の婦人科では、エストロゲン製剤を内服したり膣内に挿入したりして治療を試みます。それで症状が軽快すれば良いのですが、中には効果がない女性もおられ、そんな患者さんが漢方外来に紹介されてきます。今回ご紹介する患者さんもそんなホルモン剤が無効の患者さんでした。

漢方外来に最初にこられた時も、「膣の中がほてって気持ちが悪い」と訴えておられました。しかし、症状について詳しく伺うと、そのほてりは膣内にとどまらず、下半身全体にまで広がり、最近では上半身までのぼせるとのことでした。これは単なる萎縮性陰炎というだけでは説明がつかないような症状です。そこで腹部の診察をいたしました。すると下腹部の圧痛があり、舌下静脈の怒張も認めました。これは漢方医学的に「瘀血」と呼ばれる微小循環障害の所見であるため瘀血の治療薬である桂枝茯苓丸エキスを1日7.5g食前3回投与で処方いたしました。

内服10日後の再診時、患者さんは「下腹部から下肢にかけての灼熱感はずいぶんましになった」と喜んでくださいましたが「でもやっぱり、足の裏がほてって気持ちが悪く眠れない」と今度は違う不快感をおっしゃいます。

そこでもういちど腹診をとったところ、初診時とは随分違う所見がとれました。心下痞鞭と臍上悸がなくなり、かわりに臍下不仁が認められました。これは臍と恥骨の間の左右の腹直筋の間に隙間が触れる所見であり「腎虚」と呼ばれる状態にみられる所見です。漢方で腎は臓器としての腎臓のことではなく「人間が生まれ持っている生命力」を表します。それゆえ老化によって生命力が落ちてくることを腎気の低下と言い、漢方医学的には「腎虚」と呼びます。

そこで今回はその腎虚と診断し、その治療薬のひとつである八味地黄丸エキスを1日7.5g食前3回投与で14日間分処方しました。その次の診察時、足の裏のほてりはやや軽快したものの、下腹部の灼熱感は増悪したと言います。また腹部所見でも心下痞鞭がまた出現してきてしまいました。

そこで同じ腎虚の治療薬の中から、体を温める生薬である桂枝と附子をぬいた六味丸を1日7.5g食前3回投与へ変更しました。そして18日後の4回目の受診時、その患者さんは「六味丸よりも八味地黄丸のほうが足の裏のほてりを取ってくれるので、効いた感じがしました。」と言います。足がほてる場合、一般的には六味丸のほうが効果があると言われていています。しかし漢方薬が効くかどうかは、実際に内服された患者さんの実感が一番正しいと私は常いつも思っています。それですぐに「じゃあ、やっぱり八味地黄丸で行きましょう」と返事をしました。でもそうなると下腹部灼熱感がまた増悪する可能性があります。どうしようかな・・・と思いながら腹診をとっていると、下腹部に冷たく冷えた場所があることをみつけました。臍下不仁の周囲で、手のひらサイズの場所だけがかなり冷たく冷えています。患者さん自身に伺うと、自分でも時々冷たいなと思うことがあるとのことでした。冷えがある場合八味地黄丸が効果を示します。

そこで患者さんの希望された八味地黄丸に加え、冷えをとるべく、冷えた場所にカイロを貼って保温するよう指示いたしました。それから21日後、5回目に外来にこられた患者さんは八味地黄丸と下腹部カイロによって症状が軽快したと喜んでおり、やっと満足のいく結果を得ることができました。

腎虚の治療薬である八味地黄丸は、構成生薬の一つである附子が下降系痛覚の抑制系を賦活化し、鎮痛効果を示すとの報告があります。また八味地黄丸には附子の他にも山薬、沢瀉という生薬が配合されており、血行改善するという報告があります。今回の症例では、それに瘀血の治療薬である桂枝茯苓丸と、下腹部に貼ったカイロの相乗効果により下肢および骨盤内の冷えと微小血管障害が改善し、外陰部および下肢の不快感が軽快したと考えます。

ただ、本当にそれだけだったのでしょうか。腎とは「生まれ持った生命力」のことであり、いくら元気な人でも年齢とともに少しずつ落ちてくるものです。それは昨日まで出来たことが今日まったくできなくなる、という急激なものではなく、少しがんばればできるくらいの低下なのでしょう。そのため体のほうは徐々に低下しているにもかかわらず、頭のほうをそれを認めないために、毎日少しずつ体に無理をさせて、昨日と同じ仕事量をこなすようにしているのではないのでしょうか。そんな体の無理が、だんだんと降り積もり、少しずつたまった疲れが体の症状として現れてくる。それは頭痛であったり不眠であったり外陰部痛であったり、体が出すサインは人によってさまざまです。しかし、そこではじめて頭のほうを体の不調に気がついてくれて、どうしてこんな症状があるのか、原因はなんなのかと悪者さがしを始めるようになります。不快な症状がある部位を扱う診療科に受診して、その原因を医師にみつけてもらおうとすることもあつたでしょう。しかし見つからない。そんな患者さんは一般の外来では治療ができないため、漢方外来へ紹介されます。そんな時、年齢による体力の低下を頭でも認めてあげること、さらにそれは特別に残念なことではない、当たり前なことなんだと心から納得できると、不思議と症状が軽くなることがあります。漢方薬の内服によって腎虚が軽快する過程に、そんな患者さんの心の移り変わりがあるのではないかと考えます。この患者さんから私は、年齢を重ねるということをしただけ学ぶことができました。漢方薬を構成する生薬が持つ直接の効果だけでなく、漢方薬を飲むという行為で患者さんの気持ちに変化するという間接的な効果をも実感することができ、そんな意味でも印象深い症例となりましたので、ここでご紹介させていただきました。